斬新な企画を！

総合科学部

学部別にオリエンテーション・キャンプを行うようになって以来、昨年、今年と二回の経験を重ねた。筆者は縁あって二回とも参加させてもらった。この「豊富な経験」をもとに、総合科学部オリエンテーション・キャンプについて考えてみたい。

二回とも広島市青少年野外活動センターのお世話になったが、昨年は二泊三日、今年は一泊二日ということで日程の面で変化があり、それに伴ってキャンプの雰囲気もかなり変わった。

特に、昨年は教官サイドが企画主体となってパネルディスカッション（「私にとっての総合科学部」）や卒業生の話を聞く機会が設けられたが、今年はこの種の企画が皆無であった。

今年の場合、キャンプ地に到着後、うどん作り（ないしは竹細工）、夕食、夜のキャンプファイヤー、二日目の午前はキャンプ地内でのオリエンテーリング、午後は運動会といったプログラムであった。

それなりに充実したプログラムだったといえるだろうし、スタッフやフェローとして企画段階から準備にあたってくれた上級生たちの創意工夫と莫大なエネルギーに敬意を表したいと思う。

しかし、「オリエンテーション」キャンプと銘打つ以上、多少なりとも新入生に対してオリエンテーションとなるような企画や催しが必要なのではあるまいか。もちろん、すでに入学式直後に学部紹介がなされているのだから、同じようなことをキャンプ地で繰り返すのは無意味であろう。

そこで、例えば、パフォーマンス的な要素を取り入れたコース紹介なり、新入生が少なくとも今後四年間、勉学と生活の場とする東広島市の紹介や生活情報の提供など、気楽で有意義な企画が考えられないだろうか。

とはいえ、具体的に企画し、実行するには大変な手間暇がかかるだろう。また、企画・準備・実施の各段階における、我々教職員と学生スタッフとの協力関係や仕事の分担についても、はっきりしたルールがあるわけではない。当分の間、あるべき「総科オリキャン」を求めて模索を続けざるをえないだろう。

ともあれ、昨年の新入生のうち、半数以上のものがスタッフやフェローに志願し、今年のキャンプを支えてくれたという事実に、キャンプにかかわったものとして勇気づけられている。

（コース委員会
学生小委員会 委員長　成定　薫）

オリキャンを終えて

去る四月三十日・五月一日の二日間、安佐北区の青少年野外活動センターにおいて、我らが総合科学部の新入生オリエンテーションキャンプ、通称「フレキャン」が行われた。

「フレキャン」の「フレ」には、「フレッシュマン」「フレンドシップ」の二つの意味が込められている。

新入生を迎えるにあたって、この愛称にふさわしい内容をもったキャンプをやりたいと、昨年十一月から自発的に集まった学生スタッフによる話し合いがスタートした。その人数たるや、およそ百十名。大型バス二台分、尋常ではない人数である。

全員が全員、キャンプに対して同じイメージを持っていれば議論にまとまりもつくのだが無論そうもいかず、「あべでもない」「こうでもない」を繰り返す日々が続いた。

一つの問題が終わるとまた別の問題が発生するという自転車操業的な数か月間であった。

さらに実行委員長である私が本番直前、発熱でダウンするというおまけがつき、混乱のままフレキャン当日を迎えることになった。

しかし、スタッフやフェローの努力のおかげで、怪我人を出すこともなく無事終了、ようやく一息。

今こうしてゆとりを持って振り返ると、学部オリキャンとは、新入生が自分たちの居場所である各学部の具体像をつかむと同時に、スタッフ側も一年間、あるいは二年間を通じてつかんだ自分なりの「自学部像」をキャンプという形で表現する、という意味を持っているのではないかと思う。

自分はそれができていただろうか、単なる自己満足で終わっていたのではないか……。反省はつきないが、同じ問いが毎年繰り返されて行き、それがキャンプそのものの向上につながっていくのだろう。

とにかく、総科という「拠り処」を新入生の意識の中に確立するという我々の役目は一応果たせたのではないか。

「あのときのキャンプがあるから、今の私がここにいる」新入生がそう言ってくれるキャンプであったならば幸いである。

（学生スタッフ代表　芝　宏治）